

臨床検査科 平成 13 年の歩み

臨床検査科技師長 渡 部 重 子

当院は 4 月から脳死臓器提供施設としてスタートした。臓器移植が全国的に十数例実施されているが、中でも脳死判定の最大ポイントになる脳波検査で担当の各技師から多くの課題等の報告がなされている。このような現状の中にあって、スタッフの不安や負担は大きなものがあるが、このような状況を受けての研修会が少しずつ全国展開されるようになり、出来るだけ参加の機会を得るようにしている。日々の備えに日常業務以外の時間も含めてスタッフも研鑽を積んで努力しているところだ。

また、平成 14 年 4 月稼動に向けてオーダリングの準備に入った。検査科もこれに合わせて、より患者さんへのサービスを考え、検査項目の見直しでさらに効率化を図った。糖尿病検診、特殊項目であるホルモンや腫瘍マーカーで臨床医から、さらに利用しやすくなった、と言う事から 12 月 31 日現在 31% 増の件数になった。検査科でのオーダリングの準備も順調に來ている。先の検査科内システム化の経験が活かされ、検体検査オーダー画面作成においても順調に進んでいるが、勤務外での作業に担当技師（屋敷技師）にはかなりの負担をかける形となってしまった。今後、この成果を地域医療機関との連携による検査結果の共有化、診療・検査情報等の共有化による医療事故に対する安全性の確保等に活かし、技師会の活動理念の中で謳われている所のヒューマンネットワークの構築と充実に貢献出来ればと考えている。

世界を震撼させた炭疽菌や狂牛病で平成 13 年ほど感染症への一般市民の耳目を集めた年はなかったと思う。細菌検査担当者も対応策に迫られ、

改めて感染の恐ろしさを再確認した所であった。結核感染の脅威もいまだにある。今後遺伝子検査など、より迅速な方法を取り入れて院内感染防止を含めて感染症の広がりを食い止める事に力を注ぎたい。

中核センター病院として救急救命に努力しているところだが、術中モニターにおいても週 2 回のペースで行なわれ、また連日の時間外、休日の事もあり、前年比で 39% 増となっている。

高齢化や生活習慣病による、また、新生児における先天異常の早期発見のため、エコースクリーニング検査の要望が高まっている。腹部エコー検査の拡充に関して重点的に取り組んでいかなければと考える。頸部血管エコーにおいては件数は少ないが前年の 3 倍で徐々に増えている。さらに小児科医長から新生児の腎エコースクリーニング検査の要望があり、スクリーニングの有効性の高さから実施に向けて研修に入るところである。また、マスキングスクリーニングの条件として新生児聴覚スクリーニング検査の必要性がうかがえる事から、厚生労働省の要請で全国実施が予定されているが、すでに小児科から検査科に要請があり、機器導入の時点で取り組む予定になっている。今後、さらに実施件数の増加や各診療科から領域の拡大等で、マンパワーの確保が考慮されなければならない。患者さんの需要拡大でサービスに貢献できる重要なポイントになると考える。

オーダリング構築後、検査の分野でも地域へネットワークを拡大してさらに地域への関与を深めていく事が出来ればと願っている。